

台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題の一考察 ——陳芳明によるポストコロニアル研究の展開——

張 原銘*

本稿は、台湾におけるポストコロニアル研究の代表的研究者の一人である陳芳明の著書『後殖民台湾—文学史論及其周辺』（ポストコロニアル台湾—文学史論およびその周辺）と論文「台湾研究與後殖民史觀」（台湾研究とポストコロニアル歴史觀）を取り上げ、その内容を具体的に検討することにより、主に台湾におけるポストコロニアル文化研究の到達点と課題を考察するものである。

**キーワード：陳芳明，ポストコロニアル研究，戒嚴令，自発的抵抗精神，文化的主体性，
歴史記憶の再現**

目 次

はじめに

1. 台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題
（1）「危険視される学問」から「期待される学問」へ
（2）台湾ポストコロニアル研究の後発性
（3）文化的主体性の再建
2. 台湾におけるポストコロニアル文学の特質
（1）「本土文学」による「大中国言説」への対抗
（2）「女性文学」による「男性的言説」への対抗
（3）「原住民文学」による「漢民族言説」への対抗
3. 台湾におけるポストコロニアルの歴史像をめぐって
（1）台湾における植民地社会の特質
（2）ポストコロニアル歴史觀の再構築

おわりに

はじめに

「ポストコロニアル」（植民地後あるいは脱

植民地）という概念は、第二次世界大戦後、アジア、アフリカの旧植民地が独立し、国民国家形成という歴史的状況を示す概念として用いられはじめた。しかしながら台湾において「ポストコロニアリズム」が一般化したのは、ようやく90年代になってである。

本稿でいう「ポストコロニアル」は単に植民地後のことを指すだけにとどまらない。「ポストコロニアル研究」とは、植民地体制の終結後も植民地的な支配や文化・意識が依然として残存し、あるいは形を変えた植民地主義がいっそう強化されているという現状を踏まえ、植民地時代以降の社会・文化状況を改めて再検証していく作業を意味する。とりわけ台湾におけるポストコロニアル研究は、台湾の「サバルタン」¹⁾ 諸集団（この場合は本省人である閩南人・客家人・原住民のことを指す）の文化や歴史の主体

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

性を回復するための過程を意味する。

陳芳明（Chén Fāng Míng）は、現在の台湾におけるポストコロニアル研究の領域において、代表的研究者の一人である²⁾。陳は第二次大戦後の国民党政府の権威主義的な「戒厳令体制」によって、台湾の人々が自己の歴史や文化の主体性を自由に探求することを阻害されたと指摘している。さらに、この時期に文学等の領域で作家たちは、言語表現、思考及び判断力の欠如を経験しただけではなく、郷土や国家に対するアイデンティティまで喪失するに至ったと強調している。

それゆえ、陳芳明は「ポストコロニアル研究の核心部分」が、戒厳令体制によって抑圧された文化や歴史の「主体性」の探究およびその回復にほかならないと主張し、さらに、その「主体性」の解明には、文化や歴史の再構築から着手しなければならず、「文化や歴史の主体性の再建」には、「文学作品」が極めて重要な位置を占めていると強調している。

戒厳令解除後（1987年）、台湾の民主化の進展に伴い、台湾の歴史や文化の主体性に対する探求が多くの作家たちにより急速に展開されている。彼ら／彼女らの作品の顕著な特徴は、「文化的主体性」や「歴史的記憶」を再構築していくために、文学作品を通じて社会内部のエスニック諸集団（各族群）やジェンダー、そして階級など自らの作品にそれらの多面的な声を反映させようとしていることである。

しかしながら、日本においてはこれらの作家や作品は、ほとんど本格的な研究がなされていない。したがって本稿は台湾ポストコロニアル文学の諸作品を考察した陳芳明の著作を取上げ、その内容を具体的に検討することにより、今日の台湾におけるポストコロニアル的言説の

意義や研究の現状を解明することを課題とする。

1．台湾におけるポストコロニアル研究の現状と課題

本節では、陳芳明による『後殖民台湾』（ポストコロニアル台湾）の序章「我的後殖民立場」（私のポストコロニアル立場）の内容を取上げ、台湾におけるポストコロニアル研究の到達点と課題を明らかにしたい³⁾。とりわけ次の三点を中心に検討したい。その第一は、「危険視される学問」から「期待される学問」としてみなされるようになったポストコロニアル研究の歴史的経緯に対する検討であり、第二には、台湾のポストコロニアル研究における停滞・遅滞の原因の検討であり、第三は台湾における「文化的主体性の再建」に関する考察である。

（1）「危険視される学問」から「期待される学問」へ

台湾におけるポストコロニアル研究が「危険視される学問」から「期待される学問」へと変化した契機は、「戒厳令解除」にあるといえる。かつて台湾歴史研究と言えば、一種の危険な学問とみなされ、そこには大きな政治的制約が存在した。それが変貌を遂げた契機について、陳芳明は次のように述べている。

「台湾歴史研究が徐々にそのような危機を脱し始めたのは、1987年の「戒厳令」解除以降ということである。それまでの政治的禁忌や支配的な言説が影を潜めてゆくにしがたい、台湾研究は突如としてそれまでの危険視される学問から、人々の期待溢れる輝かしい前途を秘めた学問へと変貌をとげたのである」⁴⁾。

「戒嚴令」とは、戦時及び有事や内乱に際して治安維持のため憲法を停止し、立法・司法・行政の一部もしくは全ての権力を軍部に移し、軍事的統制によって国民の権利を制限する法令であった。

台湾における戒嚴令実施の経緯について、簡潔に要約しておきたい。つまり蒋介石指導下の国民党政権は、日本敗戦後カイロ宣言（1943年）に従って日本に代わり台湾を統治した。大戦の終結と同時に再開された国共内戦に敗れた為、1949年に政府機構のほとんどを中国大陆から台湾に撤退させた。当時人口600万人の台湾に、百数十万の敗残兵が流入してきたため、台湾は深刻な混乱に陥った。それに対して国民党は「戒嚴令」による独裁体制を樹立したのである。

戒嚴令体制下において、台湾におけるポストコロニアル研究は、「台湾本土化」（台湾の文化や歴史を中心にしたナショナリズムの言説）ないし「台湾独立」と直接的な関わりをもつものと見なされてきた。なぜなら国民党政権を正統化する言説、つまり中国大陆の正統な継承者としての国民党というポストコロニアル研究では、言説や論理の矛盾を明らかにするからである。

したがって独裁支配的な国民党政権にとって、ポストコロニアル研究は許されない学問とみなされたのである。すべてこの研究に関わる人々は「反乱罪」を適應され、逮捕され、処刑される危険性と常に背中合わせの状態にあった。こうした政治的制約が存在しているからこそ、台湾におけるポストコロニアル研究は、長期にわたって危険視されてきた学問であった。

だが、民主化の進展に伴い1987年7月15日に国民党によって「戒嚴令の解除」が宣告され

た。通常台湾では、「^{ジエ・エン}解嚴」と呼ばれ、現在「解嚴前」「解嚴後」という表現が一般化されている。

（2）台湾ポストコロニアル研究の後発性

今日「ポストコロニアリズム」は、グローバルな学問として議論されている。とくに第三世界における英語圏（Anglophone area）及びフランス語圏（Francophonie）の多くの作家たちは文芸分野で国際的に注目されている。

これに対し、台湾植民地史上の日本語を使用する台湾の作家たちは、文芸分野で国際的に常に無視されているのが現状である。そのひとつの要因として、近代台湾におけるポストコロニアル経験は、西洋世界とのかかわりが希薄であるため、台湾の歴史や文学が国際的な学術研究において注目されてこなかったという点が挙げられる。換言すれば、台湾における植民地史の被害経験は適切な発言空間や位置づけが得られていないということである。

戦後多くの第三世界の国々が独立して、直ちに開始された植民地主義研究やネオコロニアリズム研究と比較して、1987年以降ようやく開始された台湾のポストコロニアル研究は、極めて遅れていると言わざるを得ない。

植民地にされたという被害経験が適切な発言権を与えられていない要因として、他にも様々な点が指摘できる。台湾ポストコロニアル研究の開始が遅れた要因に関して、陳芳明は少なくとも国内の「戒嚴令体制の実施」と中国政府の「歴史同化戦略」という2つの側面から検討できると指摘している。

まず国内状況について、陳は次のように述べている。

「戒厳令体制自体は一種の変形した植民地体制である。この体制は台湾の歴史・文学・言語・文化などを長期にわたって抑圧かつ抹殺してきたため、その関係で台湾におけるポストコロニアル研究も空白のまま停滞させることになってしまった。戒厳令による台湾文学に対する束縛や抑圧は、サイードの『オリエンタリズム』で述べられているように、表象・言説・実践の3つの次元から系統的になされてきた。教育権が支配層（戦後の国民党政府を指す）に握られ、中台の歴史を強制的に一体化してきたということがいえる」⁵⁾。

以上、陳の指摘から次の3点が重要だと考える。

第一に、台湾国内において、国民党政府の戒厳令体制は、台湾の歴史・文学・言語・文化を長期にわたって抑圧かつ制約してきた。この体制によって、台湾のポストコロニアル研究は空白のまま停滞してしまった。今日まで、戒厳令体制がどの程度台湾社会の人々の尊厳や主体性に対する直接的・間接的な打撃と損害を与えてきたのか、全面的かつ厳密な研究は今日までまだなされていない。だが「解嚴後」に台湾社会全体でみられる文化的な活気を見る限り、この空白の時期に台湾社会の人々が強いられた精神活動（思考や想像力、固有文化への誇りや伝承の努力等）及び国民国家としての主体性への犠牲は、極めて大きなものであったと考えられる。

第二に、戦後「国府」は、中国の歴史的経験をもって台湾の歴史的経験をすりかえてしまうという一方的な教育方式を実施してきた。こうした支配的な政策によって、台湾の歴史的主体性は、中国大陆中心の歴史的言説に回収される結果となった。今日、台湾社会に依然として未

解決のまま存在している「省籍衝突問題」⁶⁾の紛争は、まさにこの中国大陆中心主義的言説によって残された歴史的な「負の遺産」といえる。

第三に、台湾のポストコロニアル研究の遅れは、知識人の歴史的反省力が欠如していたことによるものでもあったが、どちらかといえば、戦後の再植民地体制（戒厳令）による制約によって形成されたといえる。したがって、戦後の国民党政府の「戒厳令文化」と戦前の日本総督府の「植民地文化」の間には、剥奪という共通性が存在しているといえる。

次に国際的条件からみると、中国政府の「歴史同化戦略」が極めて重要な要因となっている。陳芳明は以下のように述べている。

「1970年代以降、中国政府は国連ないしあらゆる国際会議で、この百年来、常に中国と台湾が帝国主義の侵略を受けてきたと強く訴えている。したがって反帝国主義、反封建主義という点において、中国政府は（中国と台湾）が疑いもなく一致した立場であると主張している。こうした中国の「歴史同化戦略」に基づく主張を考えると、中国が経験した「帝国主義」と台湾が経験した「植民地主義」は同一であるように思われるが、厳密に言えば両者の間には実に大きな差異が存在しているのである。「帝国主義」は被支配国の物質的資源や労働力を搾取しても、文化の主体性まで強制的に干渉せず、抑圧することはしない。それに対して「植民地主義」は、強奪してきた土地に直接的な政治・経済支配を行い、さらに被支配者の文化を排除かつ弾圧し、宗主国の文化を強制的に植民地の人々に植え付け、被植民者の固有の歴史記憶や文化伝統まで抑圧してしまうものである」⁷⁾。

以上、陳の指摘から次のことが注目すべきだと考える。

まず、台湾が経験した「植民地主義」と中国が経験した「帝国主義」の本質的な差異が明らかになった。端的に言えば、植民地主義による被植民地の文化への破壊は帝国主義より深刻であるといえる。帝国主義下の中国と植民地主義下の台湾を比較してみると、両者の文化的性質と経済的・政治的な構造の違いも明白になってくる。つまり台湾が経験した「植民地主義」は経済的・政治的主体性を奪った上に、固有の歴史記憶や文化伝統まで破壊したのである。

次に、中国で帝国主義の侵略を受けた地域は、ほとんど沿海地域に集中していた。広大な内陸（農村地帯）はそれほど影響を受けてこなかった。換言すれば帝国主義者は、中国で永久的文化政権を一度も樹立した事がなかったといえる。当時の中国知識者は国家の危機を強く感じていたが、彼らの思考パターンや使用言語はまったく帝国主義の影響を受けていなかった。

しかしながら、台湾が経験してきた植民地の歴史は、まったく違ったものであり、文化的主体性の喪失が中国よりも深刻であった。例を挙げると、1895年より設立された台湾総督府は、台湾人の生活内容を綿密かつ徹底的に掌握していた。1930年代以降、当時の台湾知識人にとって物を書く際の（自己表現の際の）主な思考言語は日本語であった。たとえば当時最も批判精神を持っていたとされる左翼作家たち、王白淵（Wáng Bái Yuān）、呂赫若（Lǚ Hè Ruò）でさえ日本語を使用しなければ、自分の考えは十分に表現できないと証言している⁸⁾。

これに対して中国30年代の作家は、強制的に帝国主義者の言語で文学の創造に従事したという経験はなかったのである。このような「植

民地支配」を経験した台湾の知識人たちの、旧宗主国の言語を使用しなければ、自分の考えが十分に表現できないという証言は、被植民地の文化的主体性の剥奪による深刻な問題性を提起していると考ええる。

さらに、ポストコロニアルの観点からみれば、「台湾文学」は疑いもなく「第三世界文学」だといえる。その最たる特徴は、台湾作家の「言語思考」や「ナショナル・アイデンティティの混乱と分裂」にある。

一方、中国は甚だしく帝国主義の侵略を受けたものの、「歴史の記憶」と国際的な「発言権」を一度も喪失したこともなければ、中国文学の伝統が、帝国主義の干渉によって断裂したこともなかった。したがってこのような歴史的背景からみると、中国は第三世界の文化を自称することはできないのである。

最後に、中国政府は国際社会で持つ強い発言権を武器に、台湾の被植民地的経験を「矮小化」しようという意図を持っていることが見てとれる。換言すれば、中国は「歴史同化戦略」という手法を用いて、台湾の歴史的経験を抹殺している。こうした台湾の歴史経験に対する「同化政策」はまさに覇権主義的な政策だと考える。このような形を変えた支配的な政策に対して、今後台湾の文学研究に従事する者は常に警戒しなければならないと同時に、高度な批判的立場を保たなければならないと考える。

台湾のポストコロニアル研究が国際社会で注目されず、「周辺」として存在している要因は、台湾国内の「戒厳令体制」と中国の「歴史同化戦略」にあると考えられる。このような「周辺性」が存在しているからこそ、台湾における「文化的主体性の再建」そのものが持つ重要な意義がいつそう浮き彫りにされてくるといえよう。

（3）文化的主体性の再建

台湾における「文化的主体性」を再建する際に直面する問題点に関して、陳芳明は次のように述べている。

「台湾の歴史は3つの軸によって形成されている。第一に先住民（通常台湾では「原住民」という）の歴史、第二に漢民族の移民史、第三に外来政権の植民地史である。台湾文化の形成と累積は、この3つの歴史を軸に形成されてきた。だが、台湾の近現代史を振り返ってみると、後からきた外来政権（この場合日本と戦後の国民党政権を指す）が一方的・強制的に原住民および漢民族の歴史や文化を長期にわたって抑圧してきたという問題がある。現在台湾国内での少数のポストコロニアル研究者は「外来の植民文化」に抵抗や拒否ないし逃避的な態度を示している。ポストコロニアル的立場から考えると、彼らの態度は理解できる。なぜなら、植民者の文化による台湾の文化的主体性への打撃は、植民体制の崩壊によって、自動的に回復するはずがなかったからである。日本の植民地文化と戦後「国府」の戒厳令文化によって残された影響は、今なお台湾社会を脅かし続けているという問題があると言える」^{9）}。

以上の陳芳明が指摘する台湾の「文化的主体性」の再建問題から次のことが考えられる。

戒厳令時期に「国府」の親米政策によって、アメリカから伝わってきた「モダニズム」は、ポストコロニアル的立場からみれば、まさに支配的な文化産物であるとみなすことができる。

かつてアメリカ文学による文化的援助／支配の下で、「台湾現代文学」はアメリカの「ネオ・コロニアリズムの延長」と批判されていた時期があった。だが、冷戦および戒厳令体制の

もとで外省人作家たちは、中国30年代の「左翼文学」の伝統を継承することができず、その一方、本省人作家たちが日本植民地期で活躍した「抗日文学」の伝統を継承することも禁止されていた。こうした環境の中で台湾作家は、アメリカのモダニズムを吸収することによって、個人の精神的解放を追求するしかなかった。

ポストコロニアルの観点からみれば、「モダニズム」の技法はひとたび台湾作家に吸収され使用されれば、もはや帝国文化のものではなくなり、却って台湾文学の資産になってくるといえる。したがって、植民体制による文化支配は、被植民者の文化的主体性に深刻な影響を与えたものの、この体制によってもたらされた文化をすべて否定するものでもないということがいえる。

つまり、台湾における「文化的主体性の再建」には、現在台湾に存在しているあらゆる言説：「リアリズム」・「モダニズム」・「フェミニズム」・「ポストモダニズム」などを、すべて台湾文化の一部に取り入れ、共存させておくことが必要であると考えられる。

文化的主体性の再建に関して、陳芳明は以下の方向を目指すべきだと主張している。

「台湾における文化的主体性の再建には「ポストモダニズム」的思考を援用していく価値がある。なぜなら、いわゆる「ポスト構造主義」＝「ポストモダニズム」の中心概念は、社会の内的諸集団の差異性を重視かつ尊重することだからである。換言すれば、「ポスト構造主義的思考」とは、異質的な諸要素によって組織されている文化に対して、その異なる諸要素間の「差異性」や「歴史性」を常に考慮していくことである」^{10）}。

以上のごとく、陳が指摘した方向性から次の3点が重要だと考えられる。

第一に、疑いもなく台湾は典型的な移民社会であり、多民族社会でもある。したがって、台湾の「文化的主体性の再建」は、単にひとつの民族の文化や歴史あるいはひとつの言説を中心になされていくのではない。各民族、諸集団の文化や歴史は、すべて相対的な自主関係にあるとみなされていくべきである。こうした関係の形成によって、異なる諸集団出身の作家は互いにそれぞれ本来もっている文化やアイデンティティが作品を通じて表現することができれば、より豊かな文学作品を創作することが可能となってくると考える。

第二に、エスニック・グループの観点からいえば、台湾は典型的な移民と多元的民族（原住民・客家・閩南・外省人）によって構成されている社会だといえる。本来、これらの諸集団の地位はすべて相対的な自主関係であり、さらに、集団間の文化的差異も尊重されなければならないのである。したがって「ポスト構造主義」の言説や思考は、台湾の文化的主体性の再建に極めて重要な理論だといえる。

第三に、現在台湾社会において、文化的主体性は徐々に実現化されているといえる。80年代以降、戒厳令体制の終結によって、台湾社会には次第に自由な社会情勢が形成され、それまで凍結され潜在していた文化や想像力は徐々に解放されてきた。80年代から現れてきた「本土文学」（「本土文学」とは、台湾における文学的なナショナリズムおよび台湾における文化的主権の表現／言説を意味する）、「女性文学」や「原住民文学」の勃興は、まさに各エスニック・グループの文化的主体性の回復であり、同時にこれらの文学作品もポストコロニアル研究

の成果だといえる。

2. 台湾におけるポストコロニアル文学的特質

本節では、陳芳明による『後殖民台湾』の第5章「戒厳令解除以後のポストコロニアル文学——台湾作家の歴史的記憶の再現」（1987 - 1997）を検討し、台湾におけるポストコロニアル文学の特質研究の到達点と課題を明らかにしたい¹¹⁾。第5章は1987年の「解嚴」後から1997年までの「ポストコロニアル文学作品の特質」に関する考察の章であるが、特に陳の「本土文学」・「女性文学」・「原住民文学」という三つの領域における文化的主体性と歴史記憶の再構築への検討に注目したい。

（1）「本土文学」による「大中国言説」への対抗

陳芳明は「国府」が戒厳令体制の時期に台湾のあらゆる領域で、強制的に実施していた「中国的ナショナリズム」の歴史観について、次のように指摘している。

「戒厳令時期の中国ナショナリズムを基礎にした歴史観は、スケールの巨大性および悲壮な歴史人物の描写に重点をおいてきた。換言すれば、中華民族の歴史観の再現は「大きな物語」(grand narrative)が基本である。したがってこうした「中国的ナショナリズム」の歴史観から影響を受けてきた人々は、台湾の歴史がまるで取るに足りない、ローカルな「小さい物語」(petite history)であるかのように思い込まされてきたのである。

（中略）戒厳令体制の下で、大多数を占める本省人は政治的に抑圧され、文化的に排除されていた。それは中国を中心として、支配者が意図的に設計した体制である。支配層は「中国的ナショナリ

ム」の徹底的な実行により、本省人をその固有の歴史から遠のかせ、その固有の文化が劣っているかのように思わせ、そのことによる永久的な支配を企図したのである」¹²⁾。

台湾出身の作家たちは、このような支配者の側からの歴史観に積極的に対抗していくため、文学作品を通して自らの抵抗意識を表明している。たとえば、鐘肇政（Zhōng Zhào Zhèng）は1991年に完成した『怒濤』という作品で、おびたしい日本語・中国語・閩南語・客家語を使用し、言語混交現象（hybridity）という技法を用いて、戦後初期の台湾社会における文化的アイデンティティの混乱現象を表現している¹³⁾。

彼の小説は、台湾における歴史の再構築の困難と障害に言及するにとどまらず、社会内部の諸集団の言語と宗主国の言語間に存在した相互干渉という問題まで提起しているといえる。このような問題は、支配的な中国的ナショナリズムの全盛期においては、まったく重視されてこなかったが、支配的な戒厳体制が終結した後、ようやく浮き彫りにされてきたのである。したがって、鐘肇政の小説はまさに「本土文学」による「大中国言説」への対抗として位置づけられる。

さらに、支配者のヘゲモニー的歴史観に挑戦していく台湾作家の中で、李喬（Lǐ Qiáo）の『埋冤1947埋冤』にも注目しなければならないのである。この小説は戦後1947年台湾社会で起こった「2・28事件」¹⁴⁾を中心に事件の詳しい過程を描写している。第一部の書き方は、「断片式」及び「組み立て式」という手法で、当時の台湾各地における個別の苦難物語を改めて描いている。第二部では台中の「林志天

（Lín Zhì Tiān）」という主人公を通して、戦後初期の知識人が事件中に経験した挫折や反抗の様子を描写している。

この小説の目的はただ史実の記録ではなく、作者自身が表現したい郷土のイメージとナショナル・アイデンティティの追求であると陳芳明が指摘している。なぜなら、李喬は小説の序文で次のように述べている。

「台湾人・台湾社会における数百年の変遷を描こうとするとき、私にとって歴史は、もはや記憶の中に現れる事件の変動だけではなく、記憶から諸集団の生命および文化精神の反省までに昇華したのである。そのような歴史に対する記憶と意識こそが私の文学創作の源泉となり、台湾人および土地に対する感情と理性のすべてとなっている」¹⁵⁾。

李喬のこの主張はまさに「本土文学」が表現したい中心概念だと考える。作者の記憶は「すべての集団」のためである。彼の小説は鐘肇政と同じように日本語・中国語・閩南語・客家語を同時に登場させ、多元的な言語を共存させるという手法を用いて、「解嚴後」の知識人の心情を反映している。

また、李喬は80年代以降の台湾出身の作家が国民党政権に対して抱いていた疎遠感、抵抗感を代表している作家といえる。というのは台湾出身の作家たちが、作品で用いている言説（discourse）・主題（theme）・事例（topics）がほとんどこの小説に集約され・表現されているからである。すなわち李喬の『埋冤』には、国民党軍の残虐さあるいはこの事件で罪のない人々の家族が滅亡した状況、および事件後の社会内部の悲惨な情景がすべて小説の中に反映されている。

さらに、この小説は、「解嚴後」の知識人の心情を描写しているといえる。歴史記憶に対して、李喬は過去における権威的歴史教育と異なった方法を取っている。つまり彼は小説を通じて、かつて政治的にタブー視されていた「2・28事件」の真相を暴露し、戒嚴令体制下における支配層の悪行を徹底的に批判しているのである。

以上、台湾作家の「本土文学」作品から次のことがいえよう。

「本土文学」のひとつの特徴は、戦後の台湾社会を中心に諸集団の人々の文化やアイデンティティの混乱現象を表現することである。その具体例として、鐘肇政と李喬は、作品の中でおびたしい日本語・中国語・閩南語・客家語を使用し、台湾人の「言語混交現象」を描こうとしている。

さらにもうひとつの特徴は、「中心への抵抗」・「脱植民化」・「主体性」などの言葉が頻繁に用いられていることである。作品の中には常にこれらの言葉が使用されている。このことから、台湾出身の作家たちによって書かれている「本土文学」の目的は、「大中国的言説」の歴史観に対する抵抗であることがうかがえる。

だが、陳芳明によれば、台湾社会内部の「多元的な歴史記憶」という立場からみると、李喬の「本土文学」の特質・特徴について次のことが指摘できるという。

『『埋冤』の基本的な描写手法は、「総合的」（totalization）という観点で、社会内部にいるすべての諸集団・ジェンダーを概観していくというものである。だが、このような手法には、異なる諸集団およびジェンダーの差異を区別する作業が欠如して

いるといえる。したがって、すべての台湾人の意識を代表しているかのような小説には、ある種の「全体的な言説思考」に陥る危険性があるといえる。つまり、李喬のような「本土文学」を代表している歴史の記憶は、ある意味において男性中心的ナショナリズム（国家主義）思考によって形成され、さらにその思考ですべての台湾人のアイデンティティを包括していこうとする問題を抱えている。だが、もし歴史の記憶がただ単一の男性的なものであれば、いわゆる「全面的な解放」というものはやはり不完全だと言わざるを得ないのである」¹⁶⁾。

以上、陳の指摘を踏まえ李喬の小説を考察すると、それは様々な集団の言語を登場させているものの、事件に対する人々の心情があたかも同一であるかのように描かれているように思われる。こうした観点から考えれば、台湾社会内部のジェンダーおよび各集団の差異性は反って不明瞭になっているということがいえる。したがって、台湾におけるポストコロニアル文学の特質を考察するに当たって「女性文学」や「原住民文学」の検討も重要な領域であると考えられる。

（２）「女性文学」による「男性的言説」への対抗

陳芳明によれば、ポストコロニアル時期の「女性文学」は極めて精彩で、活発である。その具体例としては「解嚴後」の「女性の歴史的発言権」を積極的に獲得していこうとしている二人の女性作家平路（Píng lù）と李昂（Lǐ Áng）の作品が注目すべきである¹⁷⁾。

平路と李昂はそれぞれ中国と台湾のナショナルな記憶に対して、女性の観点から問題提起し、「男性中心的言説」を批判している。二人の小説で用いている表現手法から、おおよそ「解嚴

後」のポストコロニアル文学における女性の思考を把握できるのである。以下、平路の作品について検討しておきたい。

平路は最初の作品『玉米田之死』（1985）から、『誰殺了×××』（1991）、そして『行道天涯』（1995）と『百齡箋』（1997）などの作品に至るまで、国家の権力とナショナリズムの記憶の合法性を絶えず問い直す姿勢を見せている。とくに『行道天涯』で、彼女は小説の中心人物として孫文の妻「宋慶齡（Sòng Qīng Líng）」に焦点を当て、意図的に女性の肉体に内在している感情を題材に、男性中心的なナショナリズムを諷刺しようと試みた¹⁸⁾。その具体的な表現手法は、次の3点である。

第一に、中国と台湾の近現代史の記述において、孫文の地位は揺るぎのない存在である。彼は中華民族の偉大な人物の象徴であり、国を誕生させた英雄でもある。このような偉大な実在人物を描写する際に、ほとんどの歴史記述は男性的・巨視的な立場から孫文と国家の歴史的に神聖な関係を描写している。だが、孫文は中国人を苦難の歴史から救済したが、皮肉にも自分の妻の内面に存在している感情を解放することができなかった。換言すれば、孫文は封建王朝を変えることができたが、意外にも女性のための政治的発言空間を残すことはできなかった。

第二に、多くの政府側の記録を見ると、孫文の身边にいる女性は小さくて取るに足らないかのように扱われ、端的に言えば、あたかも存在したことさえなかったような印象を与えている。このような不平等な関係を修正するため、平路は作品の中で孫文の妻「宋慶齡」を中心人物として、本来女性の内面に存在しているあらゆる感情および欲望に重点を置きながら、宋慶齡の心情を描写しようと試みた。

第三に、孫文の死後、権力者たちが崇高・神聖な名声を宋慶齡に付与したとき、同時にあらゆる道徳の鎖が彼女の感情や自由を束縛したということが言える。これらの崇高な名節は、宋慶齡が自ら追求したものではなく、ただ単に男性政権の権力者によって付与されたものであった。だが、これらの名節によって彼女は若くして自由に再婚もできず、「遺孀」（未亡人）を通さなければならなかったのである。

以上、平路は「身体的政治」（body politics）という手法を用いて、「男性中心的言説」を批判している。またこの作品は、中国現代史の女性のために新たな視点を示唆しているとも考えられる。つまり彼女の思考観点は、「中心」（男性中心的言説）に対する「周辺」（女性の観点）からの新しい歴史表象の形成に極めて大きな貢献をしてきたといえる。

もう一人の女性作家李昂は、作品を通じて戦後台湾の政治社会の実相を反映し、男性中心的言説に批判を提起している。彼女の思考論点は作品の『殺夫』（1983）、『暗夜』（1985）、『迷園』（1991）、『北港香炉人人插』（1997）などから窺うことができる。

『北港香炉人人插』に収録されている「戴貞操帶的魔鬼」（貞操帯をつけた悪魔）という短編小説は、男性の政治運動によって女性に植え付けられた道徳上の束縛を強く批判している¹⁹⁾。

小説の中の女性主人公は、民主運動のため当局に逮捕され、投獄された夫の代わりに議員になった。主人公は夫の代わりに議会で発言することはできたが、自分の内面世界を表現することはできなかった。換言すれば、夫が監禁されていた長い歳月の間、一人の生きている人間としてあらゆる感情や欲望をもっていたにもかかわらず、民主運動における崇高な名声が、彼女

のすべての感情を堅く縛り付けていたのである。

小説の中に使われている「貞操帯」という言葉は、民主運動の崇高な節操と同じような意味として例えられている。だが、そのような崇高な名声は夫の苦難によって作られたイメージであった。彼女は夫のため、民主運動のために貞操を守らなければならない。だが、このような道德観念の下で、主人公の感情や欲望は絶えず理性と闘い、感情の記憶は常に喪失と喚起の瀬戸際に立たされていたのである。

神聖なる男性中心的な民主運動を完遂するために、女性の身体や感情は犠牲にされなければいけないものかという大きな疑問である。つまり李昂は、主人公の矛盾に満ちた感情表現を通じて、それまで忘却されていた女性の感覚を喚起しようとしたのである。さらにこれまで、神聖なる男性中心的な民主運動を完遂するため、女性が肉体的・感情的に受けた苦痛は、国家と民族の苦しみよりも具体的で、深刻なものであることを描いている。

以上の文脈から次のことが重要と考える。台湾の歴史再建・再構築という作業は、女性作家の観点を加えたことによって、より完成度の高いものとなっていくと考えられる。つまり、歴史の記憶の再建過程で女性の声が文学作品に反映されていることが、ポストコロニアル研究にとって重要な指標だといえる。

（３）「原住民文学」による「漢民族言説」への対抗

歴史記憶の再建過程において、原住民が直面している問題に関し、陳芳明は次のように指摘している。

「これまでの原住民の歴史における「記憶喪失」

の問題は、極めて深刻である。その理由は２つある。ひとつは、漢民族の歴史記録によって、彼らの歴史認識が歪曲されたことである。もうひとつは、原住民の伝説および言い伝えが漢民族の勝手な解釈によって、歪曲されたことである。さらに、台湾人としての台湾人によるナショナル・アイデンティティの意識形成の歴史において、原住民の欠落状態は女性の場合よりも深刻である」²⁰⁾。

以上の２つの問題を回復するために、「解嚴後」原住民が歴史記憶の再建プロジェクトに参加しはじめた。原住民の積極的な文化的主体性の重視と歴史記憶の再建に参加することによって「原住民文学」は次第に文学界で注目を浴びるようになった。

具体例として「原住民文学」の作家の中では、特に第一世代の「布農／ブヌン族」出身の拓拔斯・塔瑪匹瑪（Tuobasi・Tamapima 中国語名：田雅各）と「泰雅／タイヤル族」出身の瓦歷斯・諾幹（Walisi・Nogang）に注目すべきであると陳芳明は強調している²¹⁾。

以下、田雅各の作品について次のように検討しておきたい。

田雅各（Tián Yǎ Gè）の小説は、自分の歴史の根源と文化の主体性の再構築に努力した作品として位置づけられる。「尋找名字」（名前を探す）というノンフィクションの作品では、原住民が自民族の名前や自分の名前を正すデモンストラーションに参加した事件を通して、共同体の長老たちの心情を反映しようと試みた。小説には次のような一文が綴られている。

「各原住民族が漢民族によって同化された速度は、まさに野原にいる燕が飛んでいるかのように速い。自分の共同体に強いアイデンティティをも

っている長老たちが次第に衰弱し、消え去ろうとしている。80歳になった祖父拓拔斯は、悔いを残したまま死にたくないからと、どうしても今回の「正名運動」（名前を正す運動）に参加したがった。その目的は、後世の子孫がすくすくと繁栄し、心から祝福できるような良い名前を取り返すことにあったのである²²⁾。

この祖父の心情は、まさに原住民たちが自らの文化の喪失に対して抱いていた焦りを反映している。この「名前を正す運動」もまたポストコロニアルおよび文化主体性の再建を代表していると考えられる。さらに、原住民の歴史記憶を認識する上に、もう一人の原住民作家：瓦歴斯・諾幹の詩と散文も注目すべきである。

瓦歴斯・諾幹の詩と散文の特徴は、台湾各地を放浪し、安住の場を失い、離散状態にさらされている原住民の現状を描写していることにある。『想念族人』（族人を偲んで）の「在大同」という詩で、彼の最も悲痛な訴えが表現されている。詩は、都会に身売りされた少女の運命を描写している。

「世の中にでてから、私は一度も本を手にとって朗読したことがなかった。

買われた青春の理由は、教科書のどこにも見付からなかった。

「華西街」の暗くて寒い部屋の片隅で、たまに、故郷を思い出す。

賭博と酒に溺れる母、崖に落ちて死んだ父、荒れたままの畑とまだ学校にいる弟と妹²³⁾。

この詩に対して、陳芳明は次のように述べている。

「原住民の運命は、「再植民地化された共同体」と「身体の再植民」という現実から「二重搾取」されていたということがいえる。だが、原住民のこのような歴史記憶は、漢民族の記録に残されていない。身売りされた少女の記憶は疑いもなくこの島に実在しているものである。したがって、台湾の「歴史記憶における再現作業」は、もし原住民の経験・記憶を取り入れることがなければ、実に不完全で欠落している歴史だと言わざるを得ないのである²⁴⁾。

以上、陳による「本土文学」・「女性文学」・「原住民文学」に対する考察から、1987年の「解嚴後」から1997年までの、台湾における「ポストコロニアル文学作品の特質」に関して、次の3点がいえる。

第一に、支配的な歴史記述および言説に対抗し、支配者側に偏った歴史解釈を二度と受け入れないことは、ポストコロニアル文学の特質である。どのような社会においても植民地体制によって破壊された文化的主体性は、支配的言説に対してあらゆる抵抗手段を用いて、自己の文化、歴史の大切さを強く訴えていくのである。このことに関して台湾も例外ではない。したがって、作家達が文学作品を通じて、各集団の歴史記憶を再現させることが「解嚴後」の台湾におけるポストコロニアル文学作品の極めて重要な特質だと考える。

第二に、「本土文学」・「女性文学」・「原住民文学」の台頭および勃興という現象は、まさに台湾におけるポストコロニアル的思想が普遍化し、さらに定着しつつあることを証明している。これらの作品には、1つの共通点がある。それは「中心への抵抗」・「脱植民化」・「主体性」などの概念や言葉が作品の中に、頻繁に

現れていることである。このことから、ポストコロニアル思考は台湾文学研究に定着しつつあるということが考えられる。

第三に、台湾作家からは、さまざまな角度から台湾の文化的主体性の回復および歴史記憶の再建に力を注いだ痕跡がはっきりと読み取れる。換言すれば、歴史記憶における文化的主体性の「再現」および「再構築」の達成は、台湾「解嚴後」のポストコロニアル文学作品において最も重要な指標であると同時に、最大の目的であるともいえる。

3. 台湾におけるポストコロニアル的歴史像をめぐる

本節では、陳芳明の論文「台湾研究與後殖民史観」（台湾研究とポストコロニアル歴史観）の具体的検討を通じて、台湾におけるポストコロニアル的歴史像をめぐる諸課題を明らかにしたい。とりわけ次の諸点を中心に検討したい。その第一は、台湾における植民地社会の特質を検討することである。第二に、台湾の「ポストコロニアル的歴史観の再構築」に関する考察である。

（1）台湾における植民地社会の特質

台湾における歴史解釈をめぐる諸問題について、陳芳明は次のように指摘している。

「現段階では、政治的立場の異なる研究者たちの間で、台湾の歴史解釈をめぐる主導権争いが続いている。つまり現段階の国民党の歴史観あるいは中国の歴史観は、基本的にどちらも台湾人・台湾社会を主体にした歴史観ではなく、ただ政権の主観的立場で台湾の歴史像を捉えているのである。台湾人および台湾社会を主体にした歴史観という

観点から考察すると、当然、台湾の歴史形成について注意深く再考慮しなければならないのである。つまり台湾を主体とする歴史観の再構築は、確実かつ永続的な立場で解釈すべきであり、各政権の立場からの要求によって任意に変更されるべきものではない。したがって台湾を主体とする歴史観から考えれば、台湾社会は疑いもなく一種の典型的「植民地社会」としての性質をもつといえる」²⁵⁾。

確かに陳の指摘は的確だといえよう。1544年にポルトガル人は、台湾島を遠望して「Ilha Formosa」（美麗島）と称した。それ以来、台湾はオランダ、スペイン、鄭成功、清王朝、日本政府などの政権によって被植民されてきた。言い換えれば、1622年のオランダ政権による台湾占領から、1987年の国民党政府の戒嚴令解除まで、365年間台湾は実質的に植民地にされていたということがいえる。

したがって、台湾における「ポストコロニアル的歴史像」を把握するために、まず台湾の「近現代の歴史像」を理解しなければならないと考える。

近現代の台湾社会で形成された歴史は、真正正銘の植民地の歴史である。台湾が経験してきた「植民地社会」とは、人々が外来政権から略奪および迫害を受けることである。具体的に言えば、経済的に被植民者は生産と納税の義務しか与えられず、政治的には全く発言権がないということである。

さらに、最も深刻なのは、言語や歴史あるいは文化などすべての面において、抑圧され、且つ消滅の危機に直面することである。台湾社会の発展過程において、まさにこの状態が観察される。したがって、近現代の台湾社会は「植民地社会」であることが位置づけられる。こうし

た認識を踏まえた上で、以下「ポストコロニアル歴史観の再構築」の問題を検討していきたい。

（２）ポストコロニアル歴史観の再構築

台湾のポストコロニアル的歴史観の中に、台湾住民による「自発的な抵抗精神」の文化が今日の台湾ポストコロニアル研究の領域で常に強調されている。このことに関して、陳は次のように指摘している。

「台湾の植民地としての歴史は、挫折と苦痛が充満していた歴史だといえる。だが、オランダや鄭成功および清の封建的植民地支配下での、台湾農民による武装抵抗運動は、まさに台湾が植民者に対する抵抗文化の基礎を創ったものとして位置づけられる。日本の植民地支配期の台湾知識人による思想啓蒙運動および近代的民主運動・民族運動は、さらに台湾の多元的な抵抗文化の基礎を固めたといえる。戦後の国民党政府による戒厳令時期には、台湾人は数百年にわたる長期持続的な民主の抵抗運動を基礎によりやく台湾の植民地の歴史像を書き換えたのである」²⁶⁾。

この台湾住民による「自発的な抵抗精神」の文化こそ、台湾のポストコロニアル研究の発展にとって不可欠な要素であり、それはまた台湾の「文化的主体性」の回復にとって同様である。さらにこの文化は「歴史的記憶の再建」にとってもまた不可欠といえよう。

換言すれば、台湾におけるポストコロニアル的歴史像の再構築にとって最も重要な課題は、被植民者による「自発的な抵抗文化」の重要視および「被害経験」（「受害的経験」）から「肯定的資産」（「受惠的資産」）への変換作業であ

るといえよう。

したがって、台湾における「ポストコロニアル的歴史像の再構築」に関して、次のことが重要だと考えられる。

まず、台湾の歴史観の再構築は単なる文字や記録の静態的な書き換え作業だけではなく、植民地以降及び戒厳令以降の社会変動の動的な過程まで包括しなければならない。

さらに、ポストコロニアル的歴史観の再構築は、単に台湾外部の植民地経験を検討するものではない。台湾研究の環境がすでに開放された以上、研究者は台湾内部の植民地問題に焦点を当てなければならないのである。

最後に、正確な歴史認識を再構築するには、支配者によって歪曲された歴史像や観点を修正および刷新することが必要である。換言すれば、「ポストコロニアル的歴史観の再構築」は、植民地経験の全面的な検討を通じて、どの部分が外来者の観点であるのか、どの部分が被植民者の観点であるのかを明確化することである。この作業こそがポストコロニアル歴史観の再構築において、最も重要な課題だといえる。

おわりに

これまで検討してきたとおり、陳芳明によるポストコロニアル研究から、次のことが確認できよう。

いわゆる「ポストコロニアル的立場」というものは、歴史的・文化的主体性の多面的な回復・探究にほかならない。この十数年来台湾におけるポストコロニアル理論は、もはやひとつの知的・文化的潮流となっている。さらに、この理論は台湾に存在しているコロニアリズムを批判するための重要な論点にもなっている。

台湾社会の本格的な植民地的支配からの脱却は1987年の戒厳令解除によって開始したと考えられる。この時期を境に長期にわたって抑圧されてきた言語や文学などがその活力を再生したのである。このような開放は全面的なものではないのだが、歴史的観点から見ると、戒厳令の解除は台湾社会のポストコロニアル時期を迎えるための重要な転換期であることがいえる。

台湾は典型的な移民社会であると同時に、多民族社会でもある。したがって、台湾の「文化的・歴史的主体性」の回復は、単にひとつのエスニック文化や歴史、あるいはひとつの言説を中心に展開していくのではない。各エスニック諸集団の文化や歴史は、すべて対等関係にあるとみなされていくべきである。こうした相対的な自主関係の形成によって、異なる諸集団出身の作家は、より豊かな文学作品の創作が可能となり、さらに文化的・歴史的主体性のある台湾の現状を反映できるのである。

筆者は陳芳明によるポストコロニアル研究の到達点の検討を通じて、今後の課題として次のような諸点が重要だと考える。

第一に、台湾におけるサバルタン諸集団による文学作品は、台湾社会のポストコロニアル問題を認識するために重要な指標のひとつと考えられる。なぜなら、これらは台湾の「民衆の声」や「下からの歴史」あるいは「記憶の継承」を反映した作品だからである。したがって、台湾社会のポストコロニアル的現状を認識するために、これらの作品の分析は不可欠な資料として位置づけられる。

第二に、ポストコロニアル的思考は、政治・経済などの領域はもちろん、文学領域も社会科学領域においても共通認識となりつつあるといえる。これまで検討してきたように、これらの

文学作品におけるポストコロニアル的言説の意義を社会科学的に明らかにしていくことが今後の課題だといえる。

第三に、台湾における「ナショナリズム・コロニアリズム批判」として、これらの作品研究は、日本においてほとんど本格的な研究がなされていない。したがって、今後ポストコロニアル研究をより深化させるためには、台湾におけるサバルタン諸集団の作家たちによる様々な作品の具体的な検討が極めて重要な課題であるといえよう。

本稿で触れることのできなかった「^{チェン・ツワン}養村文学」(養村とは、中国から台湾に移住してきた「外省人」が中心としている地域・コミュニティを意味する)もまた台湾のポストコロニアル文学を理解する上で重要な領域である。なぜなら、「養村文学」は二重三重の断絶によって作られた「総合文学」といえるからである。つまり、この文学は「中国」と「台湾」という二重の故郷の断絶をつなぐものであり、また「過去」と「現在」という二重の時間の断絶を連続させるものでもあるからである。したがって、台湾におけるポストコロニアル研究の現状を認識するためにも、この領域の研究は極めて重要であり、今後の課題としてさらに検討を続けたい。

注

- 1) ここでいう「サバルタン」とは、従来の国民史の本流から排除されていた他者、ないし従属的諸集団を指す。もともとはイタリアの思想家アントニオ・グラムシ(1891 - 1937)の用語である。松田博『立命館産業社会論集』第39巻第1号「A・グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書」参照。
- 2) 人名の発音表記は、中国語の表記式に依拠する。陳芳明は1947年生まれ、高雄出身。私立輔

- 仁大学歴史学部（1969），国立台湾大学歴史研究科修士（1973），アメリカのシアトル・ワシントン大学歴史研究科にて博士号取得（1978）。専攻は，南宋の中国史と日本植民地時代の台湾における左翼政治運動史と文学運動史の研究である。現在国立政治大学中国文学部にて，「台湾文学史」と「文学理論研究」などの科目を開講している。
- 3） 陳芳明『後殖民台湾—文学史論及其周辺』（以後，『後殖民台湾』と略記する）（麥田出版社，2003年）pp 9 - 19。
- 4） 陳芳明「台湾研究與後殖民史觀」(『歴史月刊』，105期，1996年) p41。
- 5） 陳芳明『後殖民台湾』p12。
- 6） ここでいう「省籍衝突問題」とは，「本省人と外省人の衝突問題」を指す。「本省人」とは，日本統治を経験した台湾人及びその子孫を意味する。「外省人」とは，戦後中国大陆から台湾に渡ってきた人々及びその子孫を意味する。戦後，本省人は外省人（国民党政権）の権威的支配に不満をもち，1947年に発生した「2・28事件」は，「省籍衝突」の具体例である。この事件による本省人の外省人に対する不信任感が今なお台湾社会内部に存在している。（若林正丈『台湾』，ちくま新書，2001年，p63）参照。
- 7） 陳芳明『後殖民台湾』pp12 - 14。もちろん，「帝国主義」と「植民地主義」は，歴史学や経済学・政治学などの立場からみれば，様々な見解があるが，ここでは「文化や歴史の主体性」に対する弾圧・排除を中心に考える場合である。
- 8） 同書p14。
- 9） 同書pp16 - 17。
- 10） 同p18。
- 11） 同pp109 - 130。
- 12） 同pp112 - 114。
- 13） 鍾肇政『怒濤』（前衛出版社，1991年）。
- 14） 「2・28事件」とは，戦後來台国民党政権による台湾知識人の虐殺事件であった。その経緯について，簡潔に言えば，国民党政権官吏の腐敗・汚職や，戦後の社会経済的混乱に対する台湾行政長官公署の無策・無能による民衆の不満の爆発，台湾行政長官の公署による急進的な「中国化」政策及び台湾人無視の日本資産接収政策や官吏登用政策に不満をもった台湾人エリート^{ヘイホゾク}の自治要求運動，これらに対して，国民党政権が武器を持たない民衆を武力鎮圧した事件であった。当時の台湾知識人の犠牲者は1万8千人から2万8千人ともされる苛酷な弾圧が行われた。その後1949年に国民党政権は戒嚴令と政治警察を実施，高圧的な専制統治は1987年に台湾の戒嚴令が解除されるまで続いた。（伊藤潔『台湾 - 四百年の歴史と展望』，中公新書，1998年，第8章参照）。
- 15） 李喬『埋冤1947埋冤』第1部（海洋台灣文教基金會出版社，1995年）p15。
- 16） 陳芳明『後殖民台湾』p115。
- 17） 同p116。
- 18） 平路『行道天涯』（聯合文學出版社，1995年）pp78 - 85。
- 19） 李昂『北港香炉人人插』（麥田出版社，1997年）pp273 - 301。
- 20） 陳芳明『後殖民台湾』p121。
- 21） 台湾原住民は，厳密に言えば「平埔族」と「高山族」に分けることができる。平埔族は平野，盆地，沿岸一帯で生活している。漢人が台湾に移入した後，比較的早く漢化された。現在，多くの平埔族の子孫は自ら漢人であると認識している。一方，高山族は，言語とエスニック・グループの違いにより，大きく，タイヤル，サイシャット，ブヌン，ツォウ，ルカイ，パイワン，ブユマ，アミ，ヤミの九族に分けられる。（台湾国立編訳館編『認識台湾（社会篇）』，財団法人交流協会訳・発行，2003年，第1章参照）。
- 22） 田雅各『情人與妓女—尋找名字』（允晨出版社，1992年）p83。
- 23） 瓦歷斯・諾幹『想念族人』（允晨出版社，1994年）p233。詩の中に書いている「華西街」という所は，現在の台北市内において，最も有名な歓楽街である。
- 24） 陳芳明『後殖民台湾』p124。
- 25） 陳芳明「台湾研究與後殖民史觀」p43。
- 26） 同論文p45。
- 付記：
- 陳芳明は，かつて「アメリカ台湾文学研究会（美国台湾文学研究会）」の創始者の1人であり，

アメリカ『台湾文化』の編集長を担当した（この雑誌は現在でも刊行している）。帰国後、民進党の渉外部長、台北市文化局局長を経て、静宜大学中国文学部と既南国際大学中国文学部にて教鞭を執っていた。若い頃には詩と評論によって、文学界で脚光を浴び、「陳嘉農」というペン・ネームで詩と散文を書いた。「施敏輝」では、政治評論を述べ、「宋冬陽」で、文学評論及び歴史伝記を著述している。1984年に『台湾文芸』で発表した「台湾文学意識」という論文は、激しい論争を巻き起こし、一時話題になった。現在、歴史及び台湾文学の研究を行い、目下『台湾新文学史』の執筆中である。

参考文献

（日本語文献）

- 伊藤潔『台湾 - 四百年の歴史と展望』（中公新書，1998年）。
- 姜尚中編『ポストコロニアル』（作品社，2001年）。
- 西川長夫『グローバル化を読み解くキーワード』（平凡社，2003年）。
- 松田博「A・グラムシにおけるサバルタン論の生成に関する覚書」（『立命館産業社会論集』第39巻1号，（立命館大学産業社会学会，2003年6月）参照。

松田博「A・グラムシと千年王国運動に関する覚書」（『立命館産業社会論集』第39巻2号，（立命館大学産業社会学会，2003年9月）参照。

松田博『グラムシ研究の新展開—グラムシ像刷新のために』（御茶の水書房，2003年）。

崎山政毅『サバルタンと歴史』（青土社，2002年）。

若林正丈『台湾』（ちくま新書，2001年）。

（中国語文献）

陳芳明『後殖民台湾—文学史論及其周辺』（麥田出版社，2003年）。

陳芳明「台湾研究與後殖民史觀」（『歷史月刊』，1996年10月号）。

李喬『埋冤1947埋冤』上・下2部（海洋台灣文教基金會出版社，1995年）。

李昂『北港香炉人人插』（麥田出版社，1997年）。

平路『行道天涯』（聯合文學出版社，1995年）。

台湾国立編訳館編『認識台湾（社会篇）』（財団法人交流協会訳・発行，2003年）。

田雅各『情人與妓女—尋找名字』（允晨出版社，1992年）。

瓦歷斯・諾幹『想念族人』（允晨出版社，1994年）。

鍾肇政『怒濤』（前衛出版社，1991年）。

A Consideration of the Present Condition(s) and Issues Related to Post-colonial Research on Taiwan

— The Development of Post Colonial Research by Chen Fang Ming —

Zhang Yuan-ming* *

Abstract: The paper will look at the current state of and issues related to post-colonial cultural studies on Taiwan. It will also consider Chen fang ming's "A Theory of the History of Taiwanese Literature in the Post-Colonial Period" and "A Historical View of Post-Colonial Research on Taiwan." Chen was a prominent researcher who specialized in Taiwan in the post-colonial period.

Keywords: Chen fang ming, Post-Colonial Research, Martial Law, The Heart of Spontaneous Resistance, Cultural Autonomy, The Reappearance of Historical Remembrance

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University